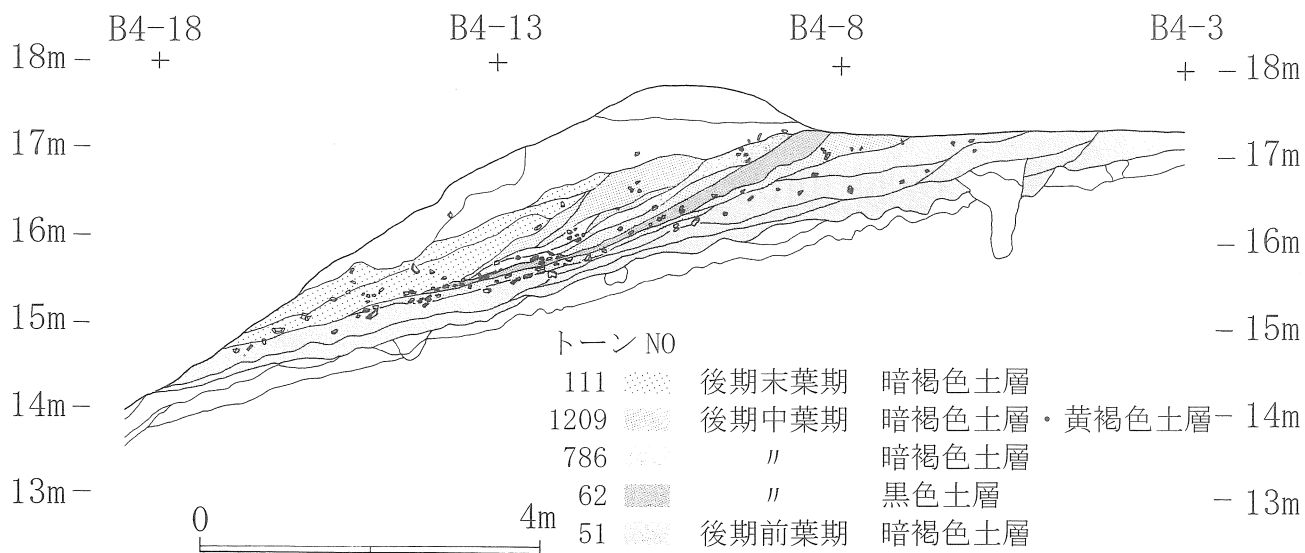
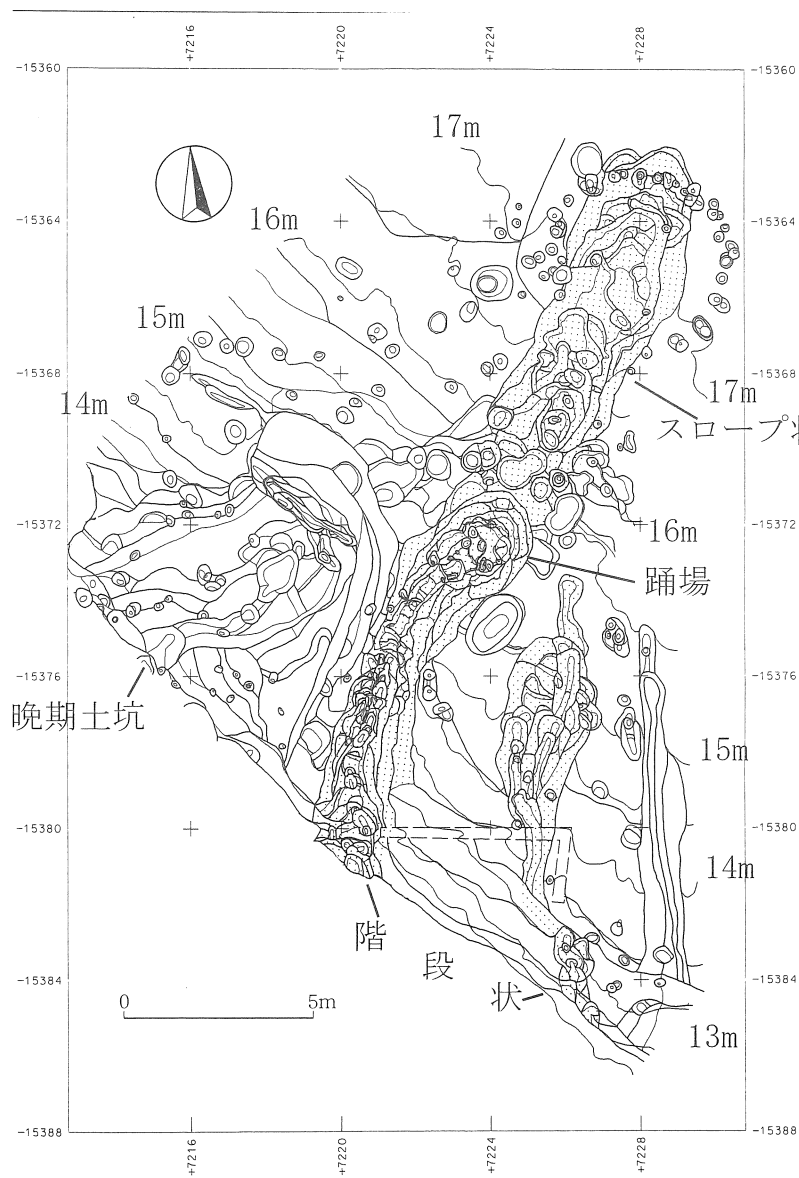




第4図 後期環状盛土遺構断面図



19 後期斜面盛土断面



20 道路状遺構内の飛び石状の土器敷き

第5図 道路状遺構平面図 (文献7加筆修正)

縄文後晩期の集落構造と「盛土遺構」

八木原貝塚と曲輪ノ内貝塚の調査事例を中心に

明治大学文学部
阿部芳郎

1 後晩期の集落と「環状盛土遺構」

関東地方の集落研究は環状集落を形成している前～中期を中心に展開してきた。後期から晩期にかけての集落跡は、堀之内1式期までに良好な調査例が多い反面、加曾利B式期から安行1式期以降になると数軒の住居が検出されている例でも稀少である。

ところで、こうした時期別の動向をひとまず確認しておいて、次に各時期の集落が発見された遺跡に目を向けてみると、数少ない後期中葉以降の集落が独立して形成されたものは非常に少なく、多くの事例が後期前葉以来の集落の上に連綿と形成されていることがわかる。つまり、後期から晩期の集落は、大半が同じ場所で継続的に営まれたものであることが指摘できるのだ。これらの遺跡の土器型式別の住居跡検出数を見ると、後期中葉以降の時期の住居跡の検出例は軒並み激減している。ところが全国の縄文時代遺跡でも稀有な大量の土器が遺跡の一箇所から集中して発見される土器塚は、加曾利B式期に印旛沼南岸から利根川下流域に出現している。さらに印旛沼南岸では、佐倉市井野長割遺跡における大型住居と土器塚、吉見台遺跡における大量の土偶と大型住居と土器塚、宮内井戸作遺跡における大型住居、四街道市八木原貝塚（千代田遺跡）における海の貝類の大量搬入（阿部2003）など、群集する至近の遺跡内で、後期中葉以降でもなお活発で濃密な活動痕跡が発見されていることがわかっている。

そして後期中葉から晩期の集落数が激減するとされている時期に「環状盛土遺構」が出現するのである。

ところが「環状盛土遺構」の性格については祭祀スタジアムという評価が先行し、当該期の地域社会の研究とは乖離した状況が続いてきた。「環状盛土遺構」の

性格を考えるためには、その根拠を問う具体的な遺跡の調査方法と集落遺跡の認識問題について検討する必要がある。

2 「盛土遺構」の発掘調査

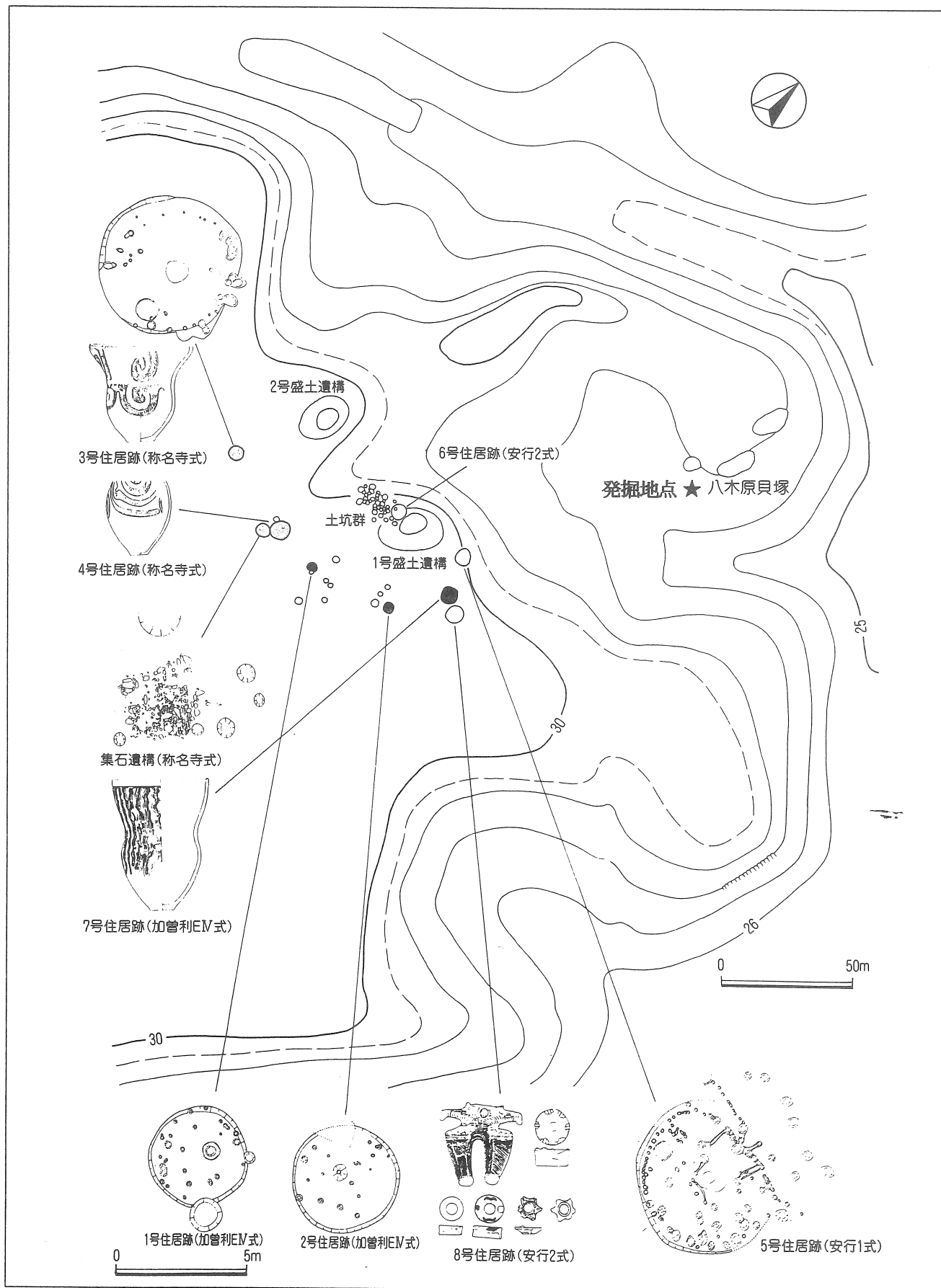
A 四街道市八木原貝塚における「盛土遺構」の調査

本遺跡は、千葉県都市公社によって「千代田遺跡」（米内、宮内1974）として発掘調査された遺跡の一部である。その際に、第IV区とされた地点には、かつて古墳として調査された部分がある。

しかし、この地点からは後・晩期の大量の遺物と110基の小竪穴が群集して発見された（第1図）。こうした事実から筆者はこの地点が縄文時代の「盛土遺構」であったという理解を示した。

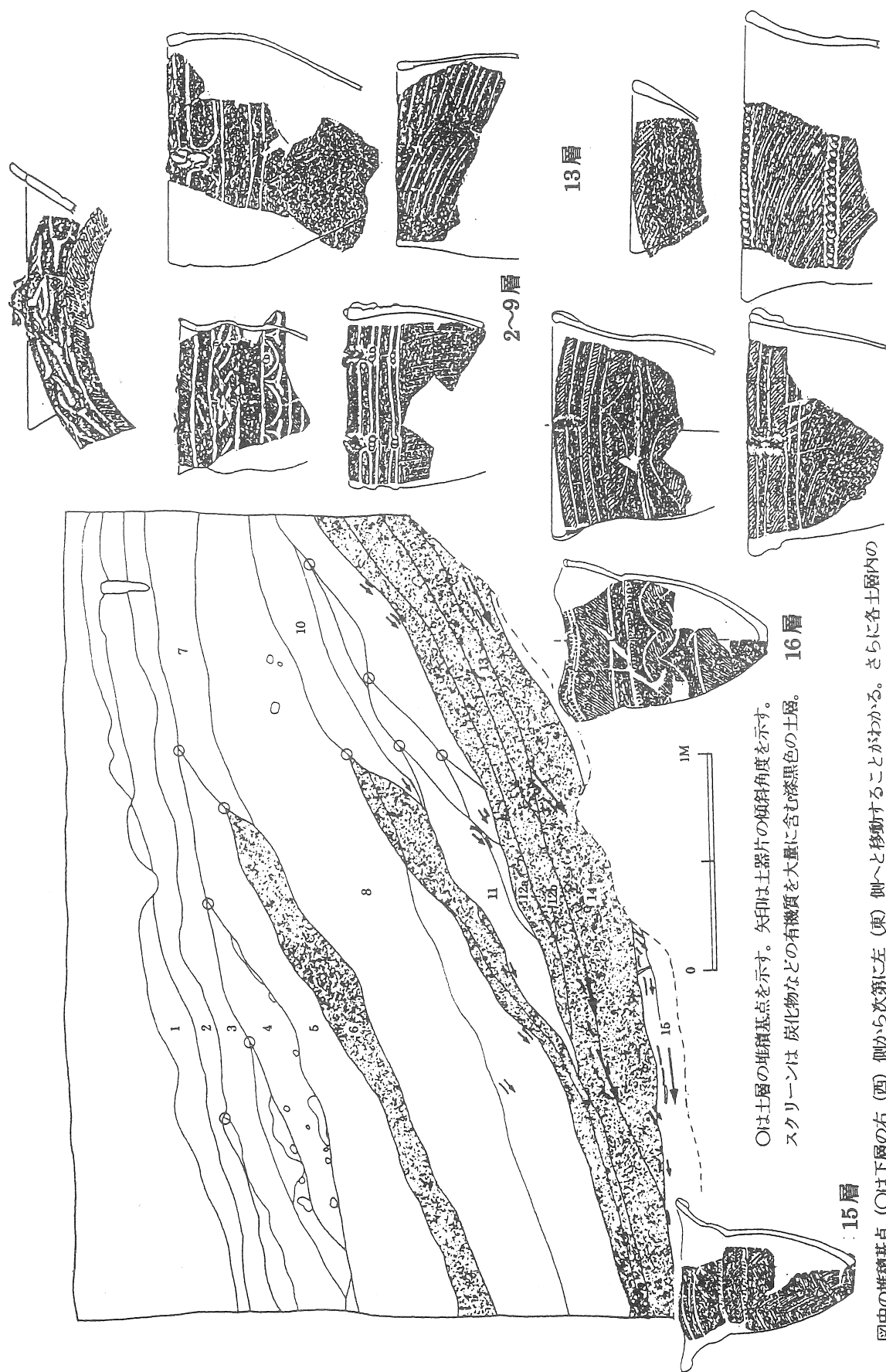
今回の発掘は、この遺跡の立地する台地の東傾斜面に残された後晩期の堆積層の形成過程を解明する目的で実施した。調査は台地の東傾斜面に2×4mのトレンチと、周辺に4ヶ所の試掘区を設定しておこなった。発掘の結果、トレンチでは最下面より21枚の土層の堆積を確認し、ここから堀之内1式から姥山Ⅱ式までの土器が層位的に検出された（第2図）。層厚は約3mを測る。また至近の位置の試掘区では、最上層に安行1式期の包含層を削平して床面とした前浦式期の住居を検出しているので、本地点のみで千代田遺跡から検出された後・晩期土器の大半の土器型式（11型式）を層位的に検出したことになる。

詳細は将来の正式報告に譲るが、この斜面トレンチの土層は黄褐色と黒色土が互層堆積をなすもので「盛土遺構」とよばれる堆積と酷似している。



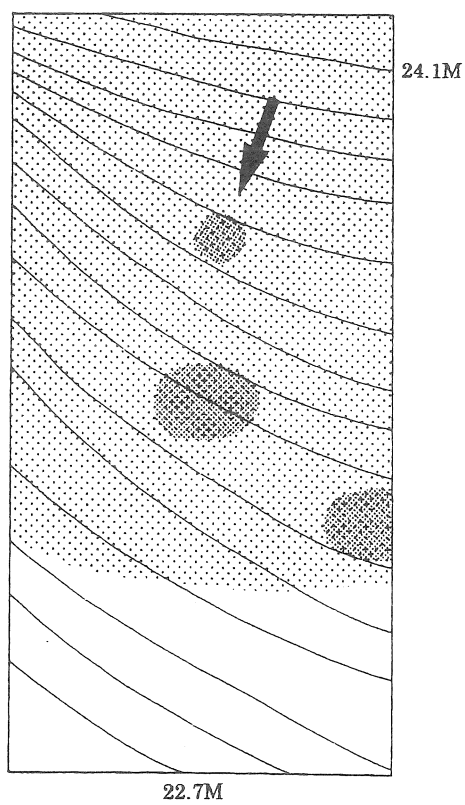
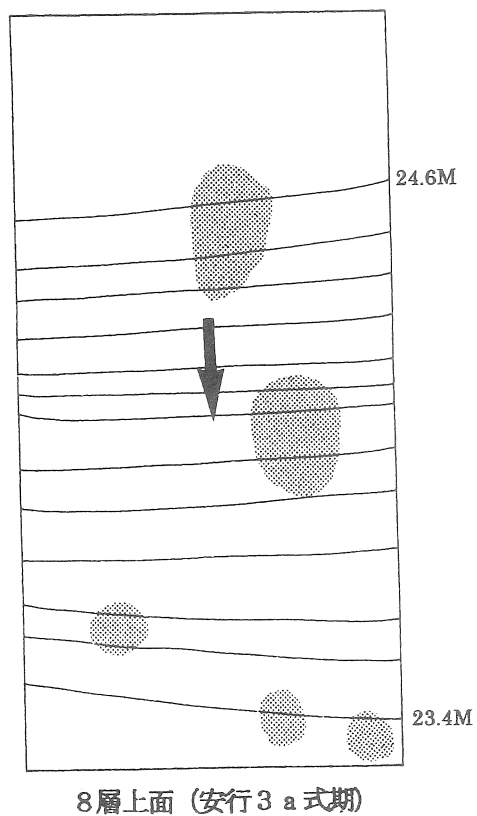
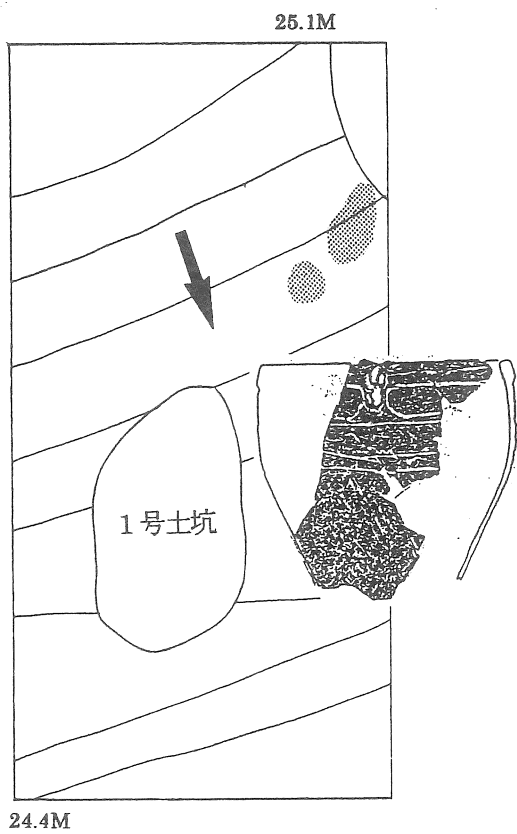
第1図 四街道市千代田遺跡の地形図と調査地点

『千葉県の歴史』資料編 考古1千代田遺跡群の図に補筆



図中の堆積基点 (○) は下層の右 (西) 側から次第に左 (東) 側へと移動することがわかる。さらに各土層内の土器片の角度は土層の堆積角度に沿っており斜面上方から順次盛土が堆積している状況がわかる。

第2図 八木原貝塚における斜面包含層の堆積状況



第3図 包含層の堆積方向と遺物の出土状況

調査の結果、斜面堆積の「盛土」について以下の3点が明らかになった。

1) 黄褐色土と黒色土が明瞭な互層構造を示すのは曾谷式期以降の時期であること。

2) 各層上面で作成した10cmコンターの観察から、堆積層は起伏をもち、かつ堆積方向が時期毎に変化すること(第3図)。

3) 斜面が平坦化した安行3a式期には堆積土を掘り込む土坑が構築されていること。

八木原貝塚の斜面堆積土層は、堀之内1式期に存在した急峻な斜面を土器型式にして11型式あまりが継起した長期間にわたり、断続的に堆積しており、それらの大半は谷部以外に連続しない局所的なものである。

B 佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査

本遺跡は印旛沼南岸に立地し、北方700mに遠部台遺跡、南方2kmに吉見台遺跡がある。曲輪内貝塚の調査は、遺跡の立地が溺れ谷を囲むように環状の高まりが巡るいわゆる「環状盛土遺構」と酷似しており、また土器塚を形成する遺跡として遠部台遺跡と類似した性格であることが予測されたため、その形成過程を解明する目的で実施した。

調査は遺跡全体にわたる地表面調査と、それらの成果を踏まえた発掘調査である。

(1) 表面調査の成果

地形面は西側に開口部をもつ馬蹄形状の高まり部分を中心に形成されている(第4図)。現地表面には中期終末から晩期中葉にいたる15型式の土器など、多量の遺物が散布しており、とくにそれは高まり部分とその中央部の窪地にかけて顕著である。また西側より入り込む浅い谷地形の入り口部分の露頭観察をおこない、谷部に相当する場所のソフトローム層が流出している状況を確認した(第5図)。

表面採集によって採集された遺物は、多量の土器のほか、石鏃、磨石、石皿、磨製石斧、石棒、硬玉製垂飾、土偶、耳飾など集落遺跡にともなう遺物組成(阿部2003)を示す。

また、馬蹄形状の高まり部分の上には5ヶ所の地点

貝塚が50mほどの距離を置いて形成されている。貝種はヤマトシジミを主体としてハマグリ、オキアサリ、アサリ、シオフキなどを少量含む。なお、地形測量によれば、中央窪地と高まり部分の最高所は1,5mほどの比高差があることが判明した。

(2) 発掘調査の概要

発掘は地表面調査の成果をふまえて、北側の高まり部分を南北に横断するトレンチにより、「環状盛土遺構」と呼ばれる遺跡の高まりの形成過程を層的に明らかにすること。さらに遺物を包含する土層を平面的に精査することにより、「盛土」内における生活面の性格を解明することの2点が目的である。

高まり部分の横断面の調査によれば、地形面の高まりはソフトローム層と、遺物を包含する土層の層厚の違いにより形成されていることがわかった。さらに地形面の最高所は堀之内1式期から安行1式期にかけての貝層や遺物包含層および遺構が累重している状況が確認できた。

高まり部分の生活面を平面的に調査したⅠ地点では晩期初頭の焼土跡4基、土坑墓1基、大型の柱穴群1箇所、安行1式期の貝層、堀之内1式期の炉跡1基、小児埋甕1、竪穴住居跡1軒、Ⅱ地点では加曾利B3式期の建物跡が発見され、これは堀之内1式期の遺構覆土を整地して床面としている。Ⅲ地点では前浦式期の建物址が検出されている。

今回の調査で検出されたこれらの遺構は、いずれも黒色土中を構築面としており、竪穴住居と土坑以外はローム層まで掘削しない。したがって「盛土」中の遺構検出は黒色土中における精査によらなければ、その大半は検出できないことになる。

(3) 高まり部分と中央窪地の関係

高まり部分では後期前葉から晩期中葉の生活面が累重している状況が確認できた。またこの高まり部分の土層堆積に、中央窪地を掘削して盛り上げたといわれる二次堆積ローム層は、まったく関与していない。また、地表面の土壌観察の結果からも、高まり部分の土

壤色調が遺跡外の表層土の色調に比較して暗い点からも、大量のローム層が盛り上げられた可能性は極めて低い。

さらに窪地側のローム層の観察によれば、ハードローム層上部に形成されたクラックの内部に黒色土が貫入した部分があり、縄文時代にハードローム層が露出していた状況が類推できる。遺跡内におけるローム層の堆積状況は試掘の成果も踏まえると高まりから外側にかけてはソフトローム層が安定して堆積し、その上部に暗褐色の無遺物層が堆積している。

それに対して窪地内側はハードローム層が露出していた状況が想定されるが、クラック内に入り込んだ土器片などから加曾利E 4式を主体としており、これは「盛土」といわれる環状の高まりが形成された年代よりも明らかに古い。

曲輪ノ内貝塚の高まり部分を形成する土壌の年代と土質やローム層の遺存状況からは、後期中葉から晩期の時期の人々が中央窪地を掘削し、その土を盛り上げたというこれまでの推測とは矛盾する。

そもそも「中央窪地」と呼ばれる地形は、溺れ谷の形成という台地浸蝕にともなって形成されたものであり、この部分は縄文時代においても、なお溺れ谷が浸蝕を続けていた場所と観るべきであろう。こうした場所は、中期終末以降に起こる気候の寒冷化などによって浸蝕を促進させた可能性が高い。

以上の成果から、曲輪ノ内貝塚の環状の高まりは、後期前葉までの生活面の上に、それ以降の生活面が累重した結果に形成されたものであると考えることができる。

3 印旛沼南岸地域の「盛土遺構」と遺丘集落

栃木県寺野東遺跡の調査を嚆矢として認識がひろまった「環状盛土遺構」について、かつて筆者はそれが遺跡数の減少をとまなう後期中葉以降の時期の集落遺跡であるという見解を発表した（阿部 1996）。そのときの論点は以下の2点にまとめることができる。

(a)「盛土遺構」と呼ばれる部分の土層の堆積状態は、後期中葉から晩期中葉にいたる長い時間を経た結果の

ものであること。

(b) 確実に「盛土遺構」の内部から住居跡が発見されていること。

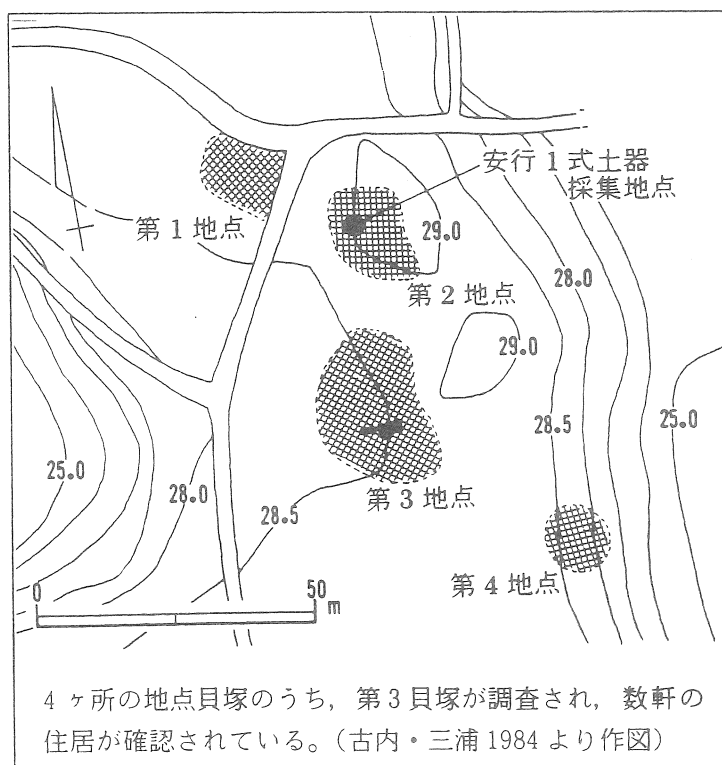
そして、「盛土遺構」の形成要因としてわたしは次の2点の現象に注目した。

(1)「盛土遺構」が形成される時期に住居構造が壁立構造へと変化し、住居の構築に土砂が大量に利用されるようになること。

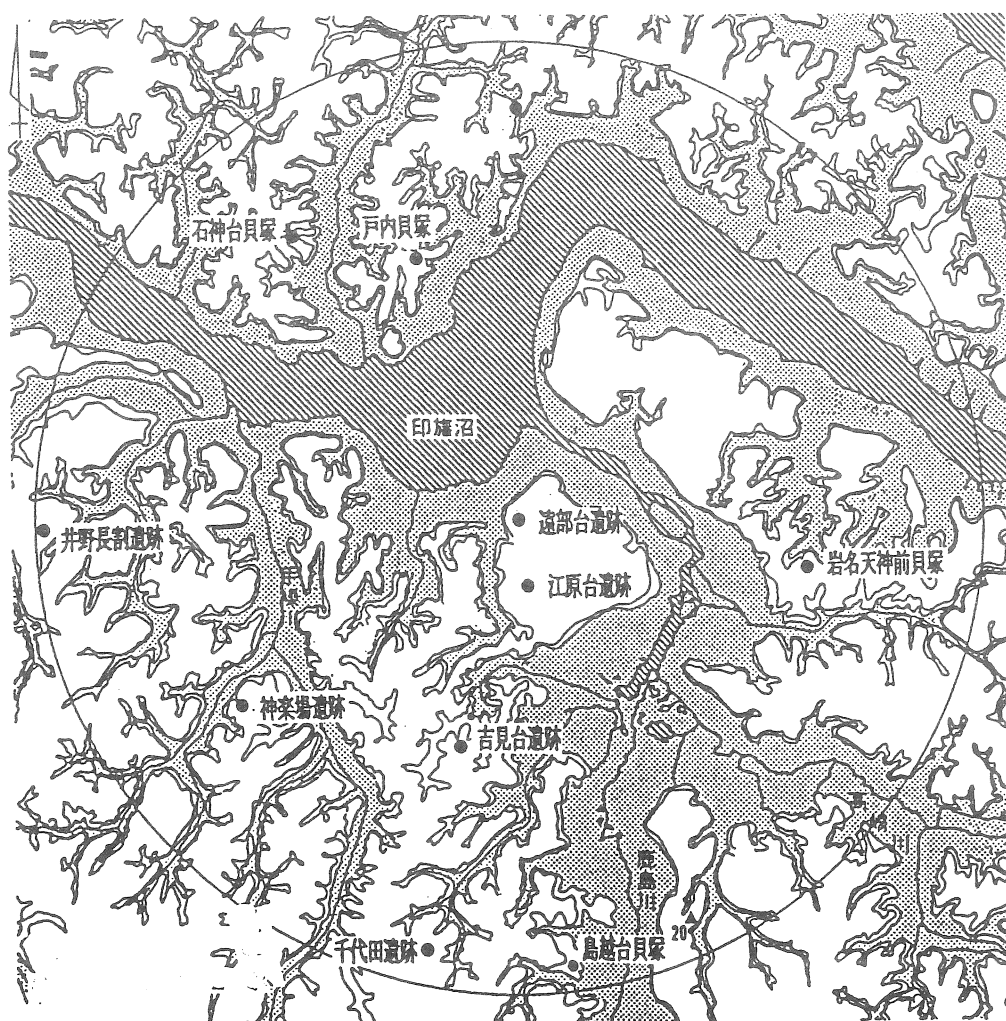
(2) 加曾利B式期以降の住居は同じ場所に反復して構築されることが多くなるために、古い住居の埋めもどしや、住居周辺の地表面の整備がおこなわれた可能性が高いこと。

さらに近年発見が相次いでいる「斜面盛土」の形成背景を解明するために八木原貝塚の調査を実施し「斜面盛土」のみが単独で存在する遺跡がないことから台地上の「盛土遺構」と「斜面盛土」は遺跡形成の過程では一連のものであると考えた。四街道市八木原貝塚の「斜面盛土」は台地斜面の小さな谷の形成年代や堆積状況などから基本的には台地上の「盛土遺構」と共通した年代のものであった。「斜面盛土」は、急峻な斜面を埋積しているので、層厚も厚く遺物の多い黒色土や、貝層と黄褐色土が互層をなしている。こうした明瞭な互層構造は、「斜面盛土」と呼ばれるものの特徴でもあるが八木原貝塚や井野長割遺跡では、溺れ谷に面した局所に限定的に認められるものであり、それは開口部に相当する場所である場合が多い。おそらくこうした小さな谷は、集落の中でも限定された廃棄空間として長期にわたり利用されたのであろう。八木原貝塚の成果をもとにすると急峻な斜面を埋積している多量の土砂はきわめて長期にわたる年代を示すものである点から、これを計画的な「埋立て」と推測することには慎重であるべきだ。むしろ特定の場所が廃棄地点として固定されていたという事実こそ注目すべきである。

一方、台地上の「環状盛土遺構」の成因を解明するために実施した佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査では「環状盛土遺構」とよばれる地形の高まりは谷頭の窪地を取り巻くようにして形成されており、中央窪地は人為的な



第6図 戸ノ内貝塚における「谷面並列型遺丘集落」の構成



第7図 印旛沼沿岸における後晩期集落の分布

掘削行為の結果ではなく、基本的には谷頭の侵食による土砂流出の痕跡であると考えられるものであった。

環状の高まり部分の「盛土」中からは、後期前葉から晩期中葉にかけての様々な遺構や生活面が検出できた。これらはいずれも、これまで集落の実態が不明確であった時期の遺構と生活面であることに注意すべきである。曲輪ノ内貝塚の「環状盛土遺構」の発掘成果は、これまで「盛土」と呼称されてきた高まり部分が、建物跡や貝塚などの生活面が累積して形成された結果であることを傍証するものであった。

そしてこれまでの当該地域の調査によって類似した遺跡が印旛沼南岸地域に群集している状況が明らかになってきた。これらはいずれもヤマトシジミを主体とした地点貝塚を環状の高まり部分に形成するという共通点をもつ点にも構造上の類似点が指摘できる。わたしはこれらの集落を立地と年代的変遷の過程で生活面が累積し、高まりを形成する特徴から、「遺丘集落」と呼称してきた。

これらの遺跡はその立地から、井野長割遺跡や、吉見台遺跡、曲輪ノ内貝塚を代表例とした環状構成をとる谷奥型環状遺丘集落と、佐倉市岩名天神前貝塚や印旛村戸ノ内貝塚や、石神貝塚のような細い痩せ尾根上に立地する谷面並列型遺丘集落として区分される2つの類型にまとめることができる。とくに注意されるのは、戸ノ内貝塚のマウンド状の高まりと地点貝塚のあり方である(第6図)。印旛沼沿岸の後晩期遺跡群における「盛土遺構」のあり方をみると、そのすべてが環状の構成をとるものではないということにも注意しておくべきであろう。

そして後晩期の集落遺跡研究の観点からみるならば、「環状盛土遺構」という用語概念は、当該期に祭祀的な大規模遺構が存在したことを主張するために作られたものであり、さらにそれが全体として単体の遺構(環状に作られた盛土遺構)であることを意味する点で、遺跡形成の実態に対して適切な用語であるとは思われない。むしろ「環状盛土遺構」が「大規模工事」による「巨大祭祀スタジアム」であるという解釈に遺跡形成論的な観点から再検討が必要とされる段階にいたっ

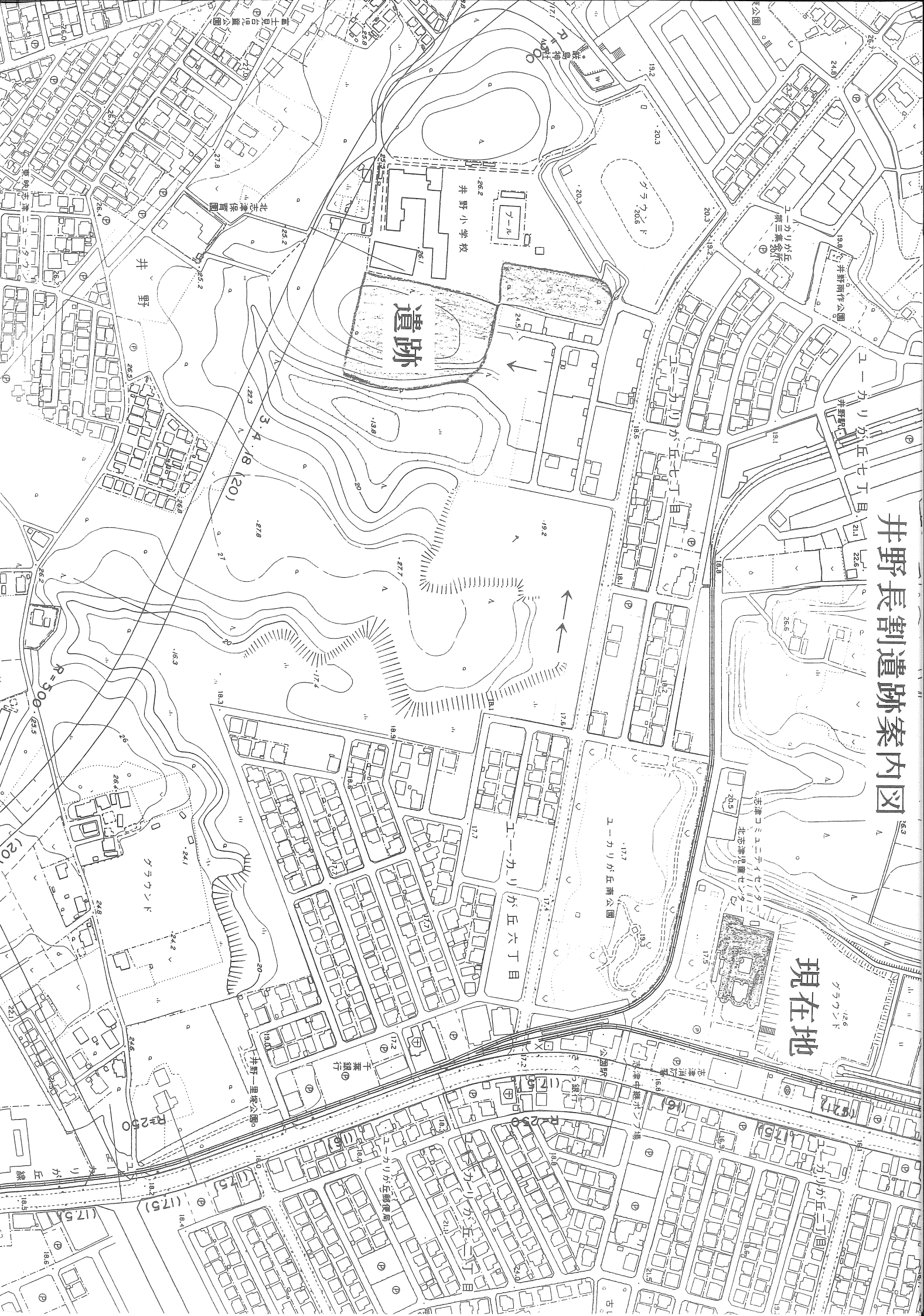
た現状を評価しつつ、高まり自体が意図的な構造物であったという結論を先に含意している「盛土」という用語は、学術用語として再検討されるべき段階を迎えたのである。そして今後は当該期の集落遺跡研究とともに、高まり自体の内部構造の解明に論点を置いた新たな議論を展開すべきである。

本研究の成果は2004年度文部科学省科学研究費(基盤研究C2)「縄文時代における地域社会と遺跡群の形成過程に関する構造的研究」(課題番号15520482)の成果の一部である。

引用文献

- 阿部芳郎 1996 「縄文のムラと「盛土遺構」」 歴史手帖第24巻8号
阿部芳郎 1996 『食物加工技術と縄文土器』『季刊考古学』第55号
阿部芳郎ほか 2000 「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造」 駿台史学代 109号
阿部芳郎 2000 「縄文時代における土器の集中保有化と遺跡形成」 考古学研究 186号
阿部芳郎 2003 「遺跡群と生業活動からみた縄文後期の地域社会」『縄文社会を探る』学生社
阿部芳郎ほか 2004 「縄文時代後晩期における谷奥型遺丘集落の研究」 駿台史学第122号

現在地



シンポジウム 「井野長割遺跡を考える」

～環状盛土をめぐって～

平成 16 年 9 月 26 日 発行

編集・発行 佐倉市教育委員会文化課
千葉県佐倉市海隣寺 97 番地
印刷・製本 株式会社 エリート印刷
千葉県成田市並木町 44・20